



展示室内の照明工事後の様子 平成29年(2017)1月31日頃撮影

年始の展示替え期間にあわせ工事を行い、館内の照明を大規模にリニューアル！展示室の照明がLED化され、龍子の作品を新たな演出でお楽しみいただけます。

# 大田区立龍子記念館版 記念館ノート

## 創刊号

発行：2017年3月1日  
編集：大田区立龍子記念館



龍子の内面にもせまる没後50年特別展は今秋開催。  
(写真は昭和30年代、自邸前の龍子)

活動に今後とも注目ください。

また、本年は龍子記念館を管理運営する公益財団法人大田区文化振興協会が、設立三〇周年をむかえる年でもあります。設立三〇周年の企画として、龍子の代表作を印刷した巨大広告の設置や、龍子旧宅(龍子公園内)の持仏堂に設けられた伝俵屋宗達《桜芥子図襖》の複製等を行う予定です。龍子記念館の

◆川端龍子没後五〇年特別展を開催！  
平成二十九年、日本画家・川端龍子の没後満五〇年をむかえました。その節目となる年、大田区立龍子記念館では、特別展「龍子の生きざまを見よ！」(十一月三日(金・祝)～十二月三日(日)(予定))を開催します。特別展においては、当館所蔵作品に加え、他館が所蔵する作品を拝借し、五〇点を超える作品・資料をとおして龍子の画業をふりかえります。本展では、生誕の地であり、名誉市民に推挙された和歌山市を中心に西日本に点在する龍子作品をはじめ、戦後の制作活動特徴づける霊場巡礼や、横山大観、川合玉堂との深い親交を物語る作品等を出品する予定です。さらに、龍子が旧蔵していた仏像(大田区所蔵)を特別出品し、豪放な大画面の作品を制作し続けた龍子の内面にもせまる展示とします。

## 館のトピックス

## 平成29年度 展示予定

- 名作展「仏と画業 「吾が持仏堂」を中心に」  
6月11日(日)まで  
展示解説：4月30日(日)、5月28日(日)
  - 名作展「絵画への意志 新規収蔵品からの展望」  
6月23日(金)～10月15日(日)  
展示解説：7月2日(日)、7月30日(日)、8月27日(日)、9月24日(日)
  - 龍子没後五〇年特別展「龍子の生きざまを見よ！」  
11月3日(金・祝)～12月3日(日)  
展示解説：11月12日(日)、11月23日(日)、12月3日(日)
  - 名作展「鳥獣百科 龍子の描いた動物たち」  
12月23日(土・祝)～平成30年4月15日(日)  
展示解説：1月28日(日)、2月25日(日)、3月25日(日)
- ※日程等は変更されることがあります。予めご了承ください。

## 館の基本情報

- 《所在地》  
大田区立龍子記念館  
〒143-0024 東京都大田区中央4-2-1  
TEL 03-3772-0680  
URL <http://www.ota-bunka.or.jp/ryushi>
- 《入館案内》
- 開館時間 午前9時～午後4時30分まで  
※入館は午後4時まで
  - 入館料 大人 200円、小中学生 100円  
※65歳以上(要証明)、6歳未満は無料  
※特別展の入館料は、企画内容によりその都度定める。
  - 休館日 毎週月曜日(祝日の場合は翌日)  
年末年始(12月29日～1月3日)、展示替えの臨時休館

# 西国巡礼にみる龍子の画業

大田区立龍子記念館担当学芸員 木村 拓也

## ■戦後の制作活動の原動力

日本画家・川端龍子の戦後を振り返ってみるとき、霊場巡礼に赴いたことはその画業を特徴づけるものと考えられる。昭和二十五年から昭和三十三年（一九五〇～五五）にかけては四国八十八ヶ所、昭和三十三年から昭和三十五年（一九五八～六〇）には西国三十三所、昭和三十六年から昭和三十八年（一九六一～六三）には坂東三十三観音を巡った。それは、毎年七日から十日程度の日程で、忙しい制作の合間を縫うように継続的に行われた巡礼であった。そして、その成果は、青龍展での目録外出品や個展、俳人・深川正一郎が刊行する雑誌『冬扇』での連載等で発表された。

龍子は巡礼に赴くにあたって、「それまではあまり手がけなかった風景画の方面に、何らか熟達したい」（『画筆点滴』『第三十二回青龍社展覧会目録』昭和三十五年（一九六〇））という意図があったと述べている。とはいってもの同時期には、目黒不動尊（目黒区）、修禪寺（伊豆市）、浅草寺（台東区）、養元寺（鈴鹿市）の天井画を次々に描いて大仕事を成し遂げていることに着目すると、龍子の信仰心と画業が強い結びつきをみせる時期と考えることができる（註1）。さらに、西国巡礼と坂東巡礼の次は、秩父三十四観音を巡り、日本百観音の巡礼を達成したいという意欲を示していることから、晩年の画業においては霊場巡礼が、制作の大きな原動力となっていたことがうかがえる。

## ■画業を考察する上での西国巡礼

龍子の戦後を特徴づける霊場巡礼のなかでも、西国巡礼へ向かった昭和三十三年（一九五八）から昭和三十五年（一九六〇）は、その画業を考察する上で重要な時期である。まず、昭和三十三年（一九五八）は、「第二回龍子の歩み」展が開催された年であった。この展覧会は、昭和四年（一九一九）に設立した自身の美術団体・青龍社が三〇周年をむかえたことを記念しての回顧展であった。次に、昭和三十四年（一九五九）にこれまでの制作活動が称えられ文化勲章を受章している。さらに、再興院展を脱退した際に途

絶えてしまった横山大観との親交が再度深まったのもこの時期のことであった。大観に龍子、それに川合玉堂が加わり、三巨匠による展覧会が昭和二十七年（一九五二）から六年にわたって毎年開催された。この展覧会では、院展、日展、青龍社といった組織や年齢差を超えて、画技を競いながら三巨匠が絆を強めたのであった（註2）。

一方で、大観、玉堂との永遠の別れも同時期に訪れている。昭和三十三年（一九五七）六月には玉堂が、昭和三十三年（一九五八）二月には大観が相次いで逝去したのであった。展覧会をとおして両巨匠の最晩年をともにした龍子は、残された者として日本画の将来を按じ、新たな決意を胸に刻んだにちがいない。この頃のインタビューで龍子は示唆的に、「アンフォルメルが世界を風靡しよう」と（中略）私は具象の世界で最後の仕事を努めたい」と発言している（来年こそは①川端龍子『産経時事』昭和三十三年（一九五七）十二月一〇日）。このあと龍子が西国巡礼に旅立ったことを考えると、巡礼の目的が「風景画」にあったということは、「具象の世界で最後の仕事」を努めるためであったと考えることができる。西国巡礼後の青龍展には、巡礼の際の取材から制作した非常に力強い「風景画」が出品されている。昭和三十四年（一九五九）の熊野川の激流を捉えた『筏流し』（当館蔵）、昭和三十五年（一九六〇）の天橋立の飛龍観を真上から描いた『天橋図』（国立劇場蔵）は、まさしく「具象」へと突き進む画家の意志に満ちている。

## ■龍子の西国巡礼

それでは、西国巡礼においてどのような取材がなされたのだろうか。昭和三十三年（一九五八）には故郷である和歌山を出発点に十一ヶ寺、昭和三十四年（一九五九）は京都、大阪の十六ヶ寺、昭和三十五年（一九六〇）には六ヶ寺を巡って、龍子は満願を果たした。当館には、第一番礼所青岸渡寺の石柱の前で、同行した三女・紀美子と龍子が記念撮影した写真が残されている（写真1）。筆者は昨夏、調査を行うために現地へ向かい、半世紀以上に龍子が歩んだ道を確かめることができた（写真2）。道中、龍子は俳句を詠んでスケッチに動んでいたという。その収獲は、図録『西国巡礼川端龍子画文』（愛媛県立美術館、昭和五十五年（一九八〇））に収録された各礼所を描いた小品と、紀行文からうかがうことができる。本年の特別展の図録においては、当館が所蔵

する一〇〇点あまりの西国巡礼スケッチと現地調査から、龍子晩年の「風景画」についての考察を掲載する予定である。

## 註

(1) 龍子の天井画制作については、拙稿「龍子芸術の莊嚴なる到達点」『川端龍子生誕一三〇年特別展画人生涯筆一管』（大田区立龍子記念館、平成二十七年（二〇一五））を参照されたい。

(2) 画商・兼素河の桜井猶司の声かけにより開催された循環展。大観、玉堂、龍子が、「雪月花」、「松竹梅」の画題を毎年順番に描いていった。

## 【参考文献】

- ・深川正一郎編『冬扇』四巻九号（十九巻四号）冬扇社 昭和三十四年十月（昭和三十九年九月）
- ・川端龍子『川端龍子自叙伝画人生涯筆一管』東出版 昭和四十七年
- ・横川毅一郎『画家龍子』三彩社 昭和三十八年
- ・足立美術館編『大観 玉堂 龍子展』昭和五十六年
- ・大田区立龍子記念館編『特別展 龍子の歩んだ四国遍路』平成二十四年
- ・パラミタミュージアム編『大観・玉堂・龍子―循環作「雪月花」「松竹梅」によせて』平成二十八年



写真2 現在の風景 筆者撮影



写真1 第一番礼所青岸渡寺にて三女・紀美子と 昭和33年（1958）6月撮影